

『資本制生産に先行する諸形態』について (完)

井上 周 八

- 一 はじめに
 - 二 『アジア的生産様式』論争について
 - 三 資本制生産に先行する所有の三つの形態について
 - (一) 『ドイツ・イデオロギー』における所有の三形態
 - (二) 『資本制生産に先行する諸形態』における所有の三形態
 - 四 『諸形態』をめぐる若干の問題点
 - (一) 『諸形態』の共同体と『ドイツ・イデオロギー』の共同体
 - (二) 所有の三形態の時間的継続関係
 - (三) 生産様式の時間的継続関係
 - 1 ホプズボームの解釈
 - 2 塩沢君夫氏の見解
 - (四) 過渡期の国家について
 - 五 アジア的生産様式は「社会的生産過程の敵対的形態」か
 - (一) 総体奴隸制は階級社会か
 - (二) 原秀三郎氏による塩沢説批判
- 『資本制生産に先行する諸形態』について (六・完)
- 六 アジア的生産様式とはなにか
 - (一) E・マンデルの「アジア的生産様式」論(承前)
 - (二) 原氏による『諸形態』の論理的構成の把握
 - (三) 原氏による「前資本主義的所有の性格」把握
 - (四) 原氏による「東洋に存在する奴隸制の普遍的形態」説
 - (五) E・マンデルの「アジア的生産様式」論……(以上既載)
 - (六) E・マンデルの「アジア的生産様式」論(承前)
 - (七) 小林良正氏の「アジア的生産様式」論
 - (八) 塩沢君夫氏の解釈
 - (九) 塩沢氏の「共同体」と「生産様式」に関する最終の見解
 - (十) ヴェラ・ザスリッチ宛書簡・草稿の検討

シュレ・カナルやモーリス・ゴドリエなど(フランスの雑誌『パンセ』)でその主張を発表した人たちは、マルクスやエンゲルスがアジア的生産様式をとく鍵として重視した水利労働やその他の大規模労働の役割を無視し、階級社会の発生にあたって、いつでもみられる諸特徴をアジア的生産様式の諸特徴であると無意識に規定してしまつたとして、マンデルは続けて次のように反論する。すなわちこのばあい、かれらによつて論証されたものとは、ただつぎの事柄、「これらすべて、のばあいに、まずもつて問題なのは、共通の利害(たといそれが空想的、宗教的あるいは魔術的利害であつても)を目的として、共同体の全員が一致して自発的にさしだす貢物であるということ。やがてだんだんと、部族の特権階級、あるいは部族間にわたる特権階級が、さしあたりこの貢物の利益権をわがものとし、ついでその所有権をわがものとしてゆくということ。さらに、多少とも長期にわたる一定期間のあいだ、村落共同体に基礎をおく《底辺の民主主義》が、しだいに頂点で形成されてくるあたらしい支配階級の表現としての《専制的》政府と共存していること」(『カール・マルクス』一六六ページ)だけである。だからこうした立場からは、アジア的生産様式とは、結局村落共同体と中央搾取権力とのある独自の結合に帰結するとまづはじめに前提しておいて、黒アフリカ、コロンブスの発見以前のアメリカ、のみならず地中海ヨーロッパ、すなわちエトルリアやクレタ・ミケーネ文明にまで、この《アジア的》生産様式が当然発見できることにはさ

さか驚いてみせるということがおこるのである。だがこうした還元操作がさいわいに成功したとしても、これほど拡大されたカテゴリーのなかに、特殊アジア的なものがまだ存在しているのかどうか。「いうまでもなく答えは明らかである。まさしくマルクスとエンゲルスが分析の出発点としたもの、つまり国家の肥大した専制的性格、土地私有の欠如、といった現象が、そこではとりわけ無視されてしまうのである」(同上二六六ページ)。

次に「あらゆる社会が、《無階級社会から階級社会への移行》にあたって必ず通過する段階というふうに、《アジア的生産様式》の概念を過度に拡張してしまう」と、マルクスがこの概念にあたえていた肝要なもう一つの側面がすっかりぬけおちてしまうとして、マンデルは次のようにいう。

「クラン共産制と奴隸制社会あるいは封建社会とのあいだに挿入される一社会として《アジア的生産様式》を規定するならば、そして、あるばあいには奴隸制社会に、他のばあいには封建社会に《分岐する》ものと規定するならば、東洋史に特有なもの一切をふたたび廃棄してしまい、《奴隸制》一般だとかあるいは《封建制》一般だとかいったあの古めかしい紋切型の考へに、ちょっと回り道をして東洋史をつれもどすことになつてしまふだろう。しかもそのさい、これらの諸概念を過度に拡大して用いることに、あらかじめ遺憾の意を表しておけば、それで済むというものではない。マルクスとエンゲルスが《アジア

的生産様式」という概念にふくめていたのは、たんにインドあるいは中国の、すでに過去の霧のなかに消え失せてしまった或る《原始》社会だけではなくて、資本による征服（インド）あるいは大侵入（中国）の前夜、一八世紀に、ヨーロッパ、産業資本が発見したインド、および中国社会でもあった、という事実がよく理解されていないようである」（同上二六六一―二六七ページ）。このようにのべたあと、マンデルは、次の極めて重要な指摘を行う。

「《アジア的生産様式》の概念からその特有の意義をぬぎとってしまふと、西欧や地中海ヨーロッパとくらべての、東洋の特殊な発展を、もはや説明することができなくなってしまうのである。マルクスとエンゲルスによつてあんなにもはっきりと適用されていた諸社会を分析する用具としての、この概念の主要な有効性がなくなってしまうこととなる。この有効性をふたたびとりもどそうと思えば、この概念がそもそもどのようにに定式化されたかという始源にたちもどり、マルクスとエンゲルスがこの概念の機能として予見していたこと、すなわち、西欧の歴史的発展とくらべての、インド、中国、エジプト、イスラムの歴史的発展の特殊性を説明するという機能を、復原させなければならぬ」（同上二六七―二七七ページ）。

さて、以上のマンデルの所説は、アジア的生産様式の——というよりはアジア社会の——独自性を指摘している点でかなり説得的である。しかし他方パンセ派の「アジア的生産様式の支

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

配的な社会は、無階級社会から階級社会への過渡期である」という主張も、「あらゆる社会」でそうであるかどうかは問題としても、極めて有力であろう。実は、この主張は「あらゆる社会」という点を除けば、決してマンデルのいう「アジア的生産様式がアジア社会に特有の生産様式である」という主張と矛盾するものではない、と考えられるのである。もっとも、過渡期社会というばあい、この過渡期社会がある一つの社会構成体という質をもっているのか、つまり、ある社会構成体と別の社会構成体との過渡社会であり、過渡社会であるという点で、独自の社会構成体として把握できると考えるのか、把握できないと考えるべきなのか、を明らかにしておくなくてはならない。「無階級社会から階級社会への移行をあらゆる社会構成体」という表現に接するとき、移行期社会は、独自の社会構成体を形成していると前提されているようであるが、この点は疑問であつて「無階級社会から階級社会への移行にあつて通過する段階」という表現の方が妥当と思われる。しかし、過渡期とか、移行段階という場合でも、基本的には、過渡期もしくは移行段階にあるその社会が、その前後のどちらの社会構成体に属するものが明らかでなければならぬ苦である。たとえば、絶対王政が封建社会とブルジョア社会の過渡期にあらわれながら、基本的には封建社会に属する——という見解が妥当である、と思うのだが——というようにである。そして、アジア的生産様式が過渡期社会であるとすれば、その性格はどのようなものであり、

基本的にはどの社会構成体に属するものであるのか。こうした問題の解決は、社会構成体の発展についてのマルクスの規定とスターリンの規定をどう理解するか、という問題を考えるうえでも必要なことであろう。アジア的生産様式とは、無階級社会から階級社会への過渡段階もしくは過渡社会であるが、それは基本的には無階級社会であると考えられる。また、アジア的生産様式というばあい、そもそも生産様式とは何かが当然明らかにされていないなければならない。生産様式は狭義には「生産の方法」という意味に用いられるが、一般には、生産における人と人との関係（生産関係）と人と自然との関係（生産力）の統一（または同一）として把握されており、ある生産様式Ⅱ方法が支配的となった場合、たとえば資本制的生産様式Ⅱ方法が支配的となった場合、その社会は資本主義社会とよばれる——したがって社会構成体も資本制社会構成体となる——のである。つまり、ある社会における支配的生産様式が、その社会の質を規定するのである。だからアジア的生産様式という範疇が、社会の質を規定する範疇として有効であるとするならば、それはアジアという地域的名称で限定されながら、地域的に制約されない歴史的に規定された社会の質を規定する一般的範疇でなければならぬ。つまり、地理的・地域的名称を冠せられながら、地理的・地域的に限定づけられないのである。こう考えた場合、マルクスが、「大ざっぱにいって、経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近

代ブルジョア的生産様式をあげることができるといった場合、アジアという限定された地域に典型的に発生した生産様式を指すと同時に、アジアにのみ発生する生産様式をさしていたのではなく、当時の段階でアジアで典型的に発生された氏族共同体的生産様式一般を指していた——したがって、それが他の地域に発見されてもよい——と考えられるのである。一八五五年から五九年当時のマルクスの原始社会についての認識はまだ限られていたとはいえ、血縁的種族共同体Ⅱ原始共產社会が、「原始人群」としてのまだ動物的要素の多く残されていた集団から、次第に氏族の共同体としての人間社会の独自性を濃厚にしてきた集団に発展し、マルクスが東洋社会で発見したアジア的生産様式、実は氏族の共同体として、それはあらゆる民族のかつての存在形態であった、という認識には到達していたと思われるのである。ただ当時のマルクスは、この社会がどのような家族制度、婚姻制度と結びついて存在したものであるかについて、まだ明らかにしていなかったのであって、この点はエンゲルスによって、「以下の諸章は、ある程度まで遺言の執行をなすものである。カール・マルクスその人が、モルガンの研究の諸成果を、彼の——ある限度内ではわれわれのと言つてさしかえない——唯物論的な歴史研究の結果とむすびつけて叙述し、それによって、はじめてその全意義をあらわかにすることを、自分の仕事として予定していた」とその序文でのべられて刊行された『家族、私有財産および国家の起源』（一八八四年

初版)をよめば明らかであろう、家族史学が科学として成立の道を歩み出したのが、一八六一年以降だったからである。だから晩年に近づいて、マルクスの研究が深まるにつれ、アジアの生産様式とは、アジアに典型的にみられる共産・共有を基本として成立する生産様式であるという考えそのものは、何も訂正すべき誤った考え方ではないが、しかし、ことさらアジア的という限定を必要としないと考えられた、とみてよい。

アジアの生産様式の基本的特質としてあげられる「土地私有の欠如」という点でも、歴史をさかのほればさかのほるほど、あらゆる原始社会で、私有の欠如が見出されるのであるから、何もアジアの生産様式に固有のことではない。『諸形態』でマルクスがあげている本源的所有の三形態は、いずれも、「土地私有の欠如」を基本としている点では共通であり、むしろ近代の意味での所有権という視点からは理解できない共同体と個人のかかりあいによって、別な意味では共同体的所有のなかで、諸個人の所有が存在していたのである。なお、『諸形態』での「アジア的、古典古代のおよびゲルマン的所有」の前提としての「共同体」によって支配的に示される社会構成と、『経済学批判』の序言での「アジア的、古代的、封建的生产様式」の支配的な段階での社会構成が、まったく別のものであることは、論理の必然として銘記されなくてはならないであろう。前者、つまり『諸形態』での「アジア的、古典古代のおよびゲルマン的所有」というばあいは、共同体とそこの所有が問題とさ

『資本制生産に先行する諸形態』について(六・完)

れているのであり、後者、つまり『経済学批判』のばあいは、生産様式が問題とされているのである。アジア的というばあいは、『諸形態』でも『経済学批判』でも無階級的概念として理解されているのであるが、古代的というばあいは、前者では共同体であるのに、後者では奴隷と奴隷所有者という階級対立が内容となっており、またゲルマン的というばあいは、やはり前者では共同体であるのに、後者で封建的というばあいは、封建領主と封建農民という階級対立を内容としていることに注意しなくてはならないのである。

最後に、アジア社会の特質がそのままアジアの生産様式の特質とはならない、ということを描いておこう。

(二) 小林良正氏の「アジアの生産様式」論

E・マンデルの見解とは対象的に、「アジアの生産様式」とはイコール「農耕共同体」であって、それは決して「アジア的」という形容詞で限定されるような特殊地域の現象ではなく、世界史の始源を貫く普遍的世界的現象である、との理解がある。たとえば小林良正氏の見解もそうであって、氏は、「アジアの生産様式」という言葉は、『資本論』第一巻(一八六八年)に出て来てから、マルクスとエンゲルスの著作から姿を消してしまふが、しかしマルクスは「一八八一年の草稿『ザスリツチの書簡への回答草案』で、スラヴの共同体を取り扱う際には、〈アジアの共同体〉のかわりに〈農耕共同体〉Ackerbaug-

meinde, commune agricole」という言葉を用いている。その理由は、マルクスもエンゲルスも、最初、この〈アジア的共同体〉を、アジアで発見したがために、これを、〈アジア的〉と名づけたものの、それは、その後、エンゲルスの言葉で表わせば、〈インドからロシアまで〉、〈インドからアイルランドまで〉の、広い地域に存在したことが立証され、ことにマルクスエンゲルスのお膝もとであるドイツについても、マルクスは、マウラーを引き合いにだして、太古の時代に、〈農耕共同体〉の存在したことを証言している。以上のように〈アジア的生産様式〉・〈農耕共同体〉が、たんにアジアにおける地理的現象たるにとどまらず、世界史の端初において、いずこにも見いだされるものとすれば、これを〈アジア的〉と呼称することは、不適當となるわけである」(小林良正『アジア的生産様式研究』、大月書店、一九七〇年三月、序文Ⅶページ)とのべている。

また別の箇所では、「マルクスおよびエンゲルスは、まず『ドイッ・イデオロギー』で、人類史の初発段階として、〈部族所有〉、すなわち部族の共同所有、つまり私的所有の欠如、その意味で、各人平等の原始共同社会から出発し、そしてその後の研究において、このような共同所有、私的所有の欠如のパターンを、まずアジア(東洋)で発見し、『経済学批判』では、いわゆる〈アジア的生産様式〉の仮説を設定した。そしてその後の研究の結果は、つぎの二つの方向を指示したと思われる。

(1) その後の研究の結果、〈アジア的生産様式〉が、内容的に

インドないしアジアに限定されるものでなく、少なくとも、かつては、〈インドからロシアまで〉ないし〈インドからアイルランドまで〉、そしてドイツの古代にも見いだされることが明らかとなった。この点から、今や〈アジア的〉という言葉が、不適當になつてきたと思われる。

(2) 仮説としての〈アジア的生産様式〉を、だんだん内容的に掘り下げていった結果、〈農村共同体〉を掘り当て、さらにそれを掘り下げて、〈農耕共同体〉に到着し、それだけ、その内容も具体的になつてきたとともに、それはすでに、世界史的な規模で問題とされてきている。

さてマルクスは、『資本論』第一巻において、……〈古代アジア的生産様式〉という言葉を使っているが、しかしその後は、この言葉を使っていることを知らない。しかしさればといつて、このことによつて、マルクスが、〈アジア的生産様式〉そのものを放棄したとみるのは早計であつて、むしろ〈アジア的生産様式〉という言葉を使わなくなつたとみるべきものである。ガルーシャントツが指摘しているように、捨てたのは、言葉であつて、決して概念そのものを捨てたのではない。その内容なり概念そのものは、その後は、〈農村共同体〉なり農耕共同体という言葉で表現されたものである。つまり〈アジア的生産様式〉・〈農耕共同体〉は、その後も、マルクスおよびエンゲルスの不断の研究によつて、その内容を豊富にされていくのである。」(同上九九―一〇〇ページ)とのべている。

以上の論旨は氏の右の著書全体の基調となっている。

しかし、ここで一言しておく、すでに『ドイッ・イデオロギー』で、人類史の初発段階として、種族の共同所有、私的所
有の欠如、各人平等の原始共同社会から出発していたマルクス
が、そのパターンをアジアで発見したからといって、アジアの
生産様式といわなくてはならないのか。そのこの研究で明らか
にするまでもなく、原始共同社会が人類史の初発段階に存在し
たことは、そのこの資料によつてますます世界的規模で確認
されるとしても、まず最初にマルクスとエンゲルスによつて規
定されていたはずである。逆にこのことがわからなくて、原始
共同社会の存在がはじめてアジアで確かめられて、それがアジア
特有の生産様式であると考えられたときのみ、アジア的生产
様式とよぶはずである。そして、そのこのアジア特有の生産様式
でないことがわかったとき、アジア的生产様式という概念が放
棄されるはずなのである。

『諸形態』執筆当時のマルクスは、人類社会の出發を共同社
会と考えていたこと、一八四八年の『共産党宣言』で原始共産
社会をのぞく人類の歴史は階級闘争の歴史であると表明してい
たこと、『諸形態』でもアメリカ・インディアン種族のゲマイ
ンデが自然的生産条件——土地——を自分のものとしていろ
のべていること、また共同体の三つの形態そのものを規定して
いることからしても、原始共同社会、したがって私的所
有の欠如がアジアに固有のものと考えていかなかったとみてよい。

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

しかし、小林氏の論旨によれば、アジア的生产様式とは何か
を明らかにするためには、『諸形態』以後のマルクスの理論を
跡づけて理解しなければならない——逆に氏の主張が成り立ち
がたいことを明らかにするためにも、そうしなければならない
——のであり、とくにマルクスの晩年の見解として極めて重要
な意義を与えられている「ヴェエラ・ザスリッチ宛の書簡」を考
察しなければならぬのであるが、それに先立って、まずこの
書簡に対する体系的理解を示された塩沢氏の解釈を検討しよ
う。

(三) 塩沢君夫氏の解釈

塩沢氏は、すでにみたようにマルクスの見解を三期に分け、
そのもつとも完成された時期を第三期とし、この第三期は、マ
ウラーを読み、モルガンの『古代社会』をも読んだあとの時期
であつて、マルクスとしては最後の完成された時期である、と
していた。そして、この期のマルクスの文献としては、「ヴェ
エラ・ザスリッチ宛の手紙」の草稿があり、エンゲルスのものと
しては、『マルク』、『フランク時代』、『家族・私有財産お
よび国家の起源』などが主なものであるが、このなかでとくに
中心的文献となるのはマルクスの「ザスリッチ宛の手紙」であ
る、として、右の手紙に展開されているマルクスの見解を検討
され、次のようにいわれる。

「1 『ザスリッチ宛の手紙』でまず注意されることは、原

始の共同体とアジアの形態とのちがいが、ここでははっきりしてきている点であり、原始的共同体からアジアの形態への発展が明らかにされた。マルクスがこの手紙で直接に論じようとしたのは、ロシアの共同体の運命についてである。このロシアの共同体（ミール）を、マルクスは農業共同体の一つの型で、ゲルマン人の共同体と同じものだとして、ゲルマン人の共同体についてには次のようにいっている。

(1) 『ロシアの共同体の型も人々が農業共同体とよぶことに同意しているところのこれらの型の一つである。西洋でこれにあたるものは、きわめて最近の時代のゲルマン共同体である。それは、ジュリアス・シーザーの時代にはまだ存在しておらず、ゲルマン諸部族がイタリヤやゴールやスペイン等を征服しにやってきたときには、もはや存在していなかった。ジュリアス・シーザーの時代にはすでに、耕地がいくつかの集団や氏族や部族のあいだに年々割替されていたが、まだ、一共同体内の個々の家族のあいだに分配されていなかった。おそらく、耕作は、集団的に、共同におこなわれていたであろう。タキトゥスが叙述しているように、ゲルマンの土壤のうえで、こういう、よりふるい型の共同社会が、自然的な発展によって、農業共同体に変形した。タキトゥスの時代以後、私たちはこの共同社会をみいだすことができない。それは、たえざる戦争と移住のうちに、いつとはなしに、死滅してしまった。それはおそらく、変死したのである。しかし、その天寿は、うごかしえない二つの事

実によって立証されている。この型のいくつかの散在的な事例が、中世のあらゆる有為転変をへて残存し、たとえば私の故郷のトレーヴ地方では、こんにちにいいたるまで維持されている。

しかしながら、もっと重要なことは、この『農村共同体』が、それからうまれてきたあたらしい共同体のうえにはっきりと痕跡をさざみこんでいることで、マウラーは後者の跡をたどることによって前者を復元できたほどである。耕地は耕作者の私有に属するが同時にまた森林や牧地や荒蕪地等はなお依然として共有であるところのこのあたらしい共同体は、ゲルマン人によって、あらゆる被征服地に導入された。自己の原型からうけついで諸性格のおかげで、この共同体は、全中世をつうじて、自由と人民生活の中心となった。

アジアでも、アフガン人などのあいだに、この『農村共同体』がみられる。しかしそれはどこでも、最近の型として、いわば古代的社会構成の最近の達成として、あらわれている。私がゲルマン共同体について、二三こまかな点にまでちいいたのは、この事実をあきらかにするためである』（選集一三巻上二〇七ページ）。

(2) 『農村共同体は、ゲルマンにおいては、よりいっそう古代的な型からでてきたものであり、ゲルマンにおける自然成長的な発達の産物だったのであって、できあいのものがアジアから輸入されたのではない。そこ——東インド——でも吾々はそれにぶつかるのであるが、それはつねに、古代的構成の死期また

は最終期としてである』(選集二三卷上一八七ページ)。

(1)(2)の個所からわかるように、マルクスはシーザー時代より後に成立して、ゲルマン諸部族の移動の頃には消滅したゲルマン人の共同体と、ロシアの共同体と同じ型のものだとしていることがわかる。しかも、さらに重要なことは、この時期のゲルマン人共同体は、『より一そう古代的な型からでてきたものであり、ゲルマンにおける自然成長的な産物の産物だったのであって、できあいのものがアジアから輸入されたのではない』としている点である。この個所から、マルクスが、この段階のゲルマン人の共同体をアジア的形態だとしていること、および、それをシーザー時代よりふるい型の共同体から自然成長的な発達によって生れたものとしていることがわかるのである。ところで、このアジア的形態の共同体と明瞭に区別されたシーザー時代の共同体とは、『シーザー時代にはすでに耕地がいくつかの集団や氏族や部族のあいだに年々割替されていたが、まだ、一共同体の個々の家族のあいだに分配されていなかった』し、耕作も『集団的に、共同におこなわれていた』という古い型のものであり、これは、アジア的形態よりさらに古い原始的共同体と考えていいように思う。以上のように、この『ヴェラ・ザスリッチ宛の手紙』の草稿においては、タキトゥス時代頃から、ゲルマン人の移動の頃に消滅したゲルマン人の共同体が、アジア的形態の共同体であり、そのアジア的形態の共同体はシーザー時代の原始共同体とは明瞭に区別され、原始

『資本制生産に先行する諸形態』について(六・完)

的共同体から自然の発達によって生まれたものであり、さらに、ゲルマン人の移動以後には、このアジア的形態の共同体は消滅していて、新しい型の共同体が成立していたというような諸点が明らかになされているのである。また、シーザー・タキトゥス時代のゲルマン人の共同体については、エンゲルスも『マルク』や『家族・私有財産および国家の起源』の中で、マルクスのこの『手紙』と全く同じような内容のものを、くわしく説明している。

2 ロシアの共同体、すなわちアジア的形態の共同体を、この手紙では農業共同体とよんでおり、この農業共同体を原始共同体と比較して、次の三点で区別している。①自然的血縁的紐帯のせまいわくをつきやぶっていること、②家屋とその付属物たる庭園とがすでに耕作者の私有となっていること、③耕地は共同体的所有ではあるが、定期的な成員に割替され、耕作者の計算で耕作し、その成果を個人的に占有する(同上二八七ページ)。したがって、この農業共同体は『固有の二元性』をもつことを特徴としている。二元性とは、共同財産を基礎とする共有の要素と、私有の家屋と耕地の分割耕作、生産物の私的占有を基礎とする私有の要素とであり、この二元性の発展として、やがて耕地が私有化し、ついに森林・牧地・荒蕪地までも私的に占取されるようになり、農業共同体は崩壊するのだとしている(同上二八八ページ)。ここであげられている三つの特色をもつ農業共同体の型は、原始的共同体から区別された共同体のアジア的形

態の基本的特徴と考えてよいであらう。タキトゥス時代から民族移動直前頃までのゲルマン人の共同体やロシアの共同体（ミール）は基本的にこのような型のものであったのである」（『古代専制国家の構造』御茶の水書房一九五八年一月、二七—三一ページ）。

つまり、塩沢氏は、ザスリッチへの手紙でマルクスは、(1)原始共同体とアジアの形態とのちがいをはっきり指摘している、(2)ロシアの共同体は農業共同体の一つの型で、ゲルマン人の共同体と同じものだとしている、(3)このゲルマン人の共同体はアジアの形態だとしている、といわれるのである。

ここでとくに注目しなければならないのは、氏が、ゲルマン人の共同体は「できあいのものがアジアから輸入されたのではない」とマルクスがのべていることから、ゲルマン人の共同体はアジアの形態だ、と結論づけている点である。だがこれはおかしくはないだろうか。マルクスは、ロシアの「ミール」が農業共同体の一つの型であること、西欧ではゲルマン共同体がこれにあたること、しかし、このゲルマン共同体は、アジアから輸入されたものではなく、より一そう古代的な型から自然成長的に発達して生まれたものであること、をのべているだけで、この農業共同体がアジアの形態であるなどとは決しているのではないのである。もともとアジアの形態、アジア的生産様式の特徴についてマルクスがのべていることを要約すれば、次の四点であらう。

- ① 土地私有の欠如。個々人は占有のみ。⁽²⁸⁾
- ② 農業と工業との不可分の統一。自給自足的停帯性。
- ③ 圧倒的水利労働の必要とそのための中央権力、東洋的専制の必要。
- ④ 国家による剰余の収納。

もし、アジア的生産様式がイコール農業共同体ならば、ゲルマンの共同体も、右の四点の特質を保持するものとなってしまふ。ゲルマンの共同体にはたして、この四点の特質が妥当するであらうか。否であることは明白である。

だから、塩沢氏の見解そして小林氏の理解も、正しいとはいえない。そこで、このような誤りをふくんでいるところの塩沢氏の最終的見解も当然、正しくない側面をふくむのである。

(28) 「私的土地所有の欠如こそ東洋天国への鍵である」（前出）とのマルクスのことばは、共同体との関係でみたばあい、そこでの近代的な私的土地所有の欠如を指摘しているのである。すでにのべたようにこのことばを近代的意味での個々人の無所有と同一視はできない。マルクスが『諸形態』で、本源的所有の三形態が共同所有であると同時に個々人の所有——または占有、当初両者の区別はない——であり、ただこの共同体所有と個々人の所有（占有）のかわり方で三形態の区別が生まれていることをのべている点は、次の引用からも推測されなくてはならない。すなわち、本源的所有の第二のばあいを説明するなかでの「個々人の所有はここでは、第一のばあいのように、それ自身直接に共同体所有であるというわけでは

ない」という一節である。ここでは、個々人の所有がはっきりと指摘されている。なお、共同体所有と私的所有の関係について、すでに指摘したところであるが、小林良正氏にみられる次のような見解にも疑問がある。

小林良正氏は、所有の第一（アジア的）形態と第二（古典・古代的）形態との差異は、少なくとも共同体と個々人との関係にかんして、ほぼ明らかである、として、次のように要約していた。

「アジア的形態においては、土地所有を握っているものは、共同体（部族）であり、したがって、そのメンバーである諸個人は、 \wedge 無所有 \vee であり、せいぜい土地占有者 Grundbesitzer にすぎず、この意味において、共同体が実体 Substanz であって、諸個人は、偶有物 Akzidenzen であり、つまり個々人は、共同体のなかに \wedge 埋没 \vee している（大塚久雄『共同体の基礎理論』、一九五五年、七八ページ）。これに反して、古典・古代的共同体にあつては、共同体所有 ager publicus にたいして、その共同体成員は、それぞれ私的の土地所有者としてあらわれ、そして共同体（都市国家 Stadt/civitas）は、上記 \wedge 自由かつ平等な私的の土地所有者相互間の関連 \vee として表われるが、しかし彼らは、それが共同体成員として、 \wedge 戦士 \vee Krieger としてのみ、共同体所有 ager publicus に対抗して、私的の所有 fundus を獲得して、私的の土地所有者たっているのである」（『アジア的生産様式研究』、大月書店、一九七〇年三月、三九ページ）。

そして氏は、「アジア的形態における共同体所有、それにはいる個々人の \wedge 無所有 \vee Eigentumslosigkeit と埋没状態が、古典・古代的形態にあつては、共同体所有にたいして、私的の所有が台頭

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

し、漸次、これを蚕食して拡大する傾向にあつたとはいへ、共同体所有、国家所有 ager publicus が、個々人のうえにのしかかり、個々人は、なお半身を、共同体に埋没している状態である」（同上）とのべていた。

しかし、古典・古代的形態は、アジア的形態にくらべ、共同体的所有にたいして、私的の所有が台頭し、共同体所有を漸次蚕食した、と理解することはできない。本源的所有の三つのばあい、共同体の一員であることが、いずれも私的の所有者たりうる不可欠の要件であることからわかるように、共同体所有と私的の所有は、むしろ相互にそれぞれの存在を相手方によって保証されるという関係にあり、ただその関係の仕方によって、三つの形態の差が生じているのである。この点を軽視して、共同体所有と私的の所有を対立的にとらえ、後者による前者の蚕食を云々するのはあやまりである。

また塩沢君夫氏も、①三つの土地所有の形態は、同時に共同体の三形態として眺むことができる、②三つの共同体の形態は、集团的土地所有の弛緩度、崩壊度 \parallel 私的の土地所有の発展度によって、論理的に段階序列として展開されている、③それは同時に土地所有と共同体がたどる歴史的發展過程と一致する、④だから三つの土地所有および共同体の形態は論理的意味で歴史的に發展する諸段階である、⑤土地所有と共同体の三形態は、その上に構成された、アジア的専制国家、古典古代的都市国家、およびゲルマン的共同体を基礎にした社会という三つの社会は、歴史的發展の段階とみることができ、⑥そして、アジア的・古典古代的・ゲルマン的という土地所有の三形態を基礎にして、アジア的・古代的・封建的の生産様式が段階的に生じたのである、⑦「アジア的の生産様式」は「社会的生産

過程の敵対的形態」の第一段階である、という七点にわたる主張をされていたが、しかし土地所有および共同体の三形態が、たとえばマルクスが『資本論』第一巻で展開した「価値形態ⅠからⅣへの発展」と同じような意味で、論理的かつ歴史的發展として把握できるものかどうか。氏は、「この三つの共同体の形態は、ただ併列されているだけでなく、原始的・種族的紐帯の弛緩度、したがって集団的土地所有の崩壊度、私的土地所有の發展度によって、論理的に段階序列として展開されている」とのべているが、まず第一に、共同体の三形態は、原始的・種族的紐帯の弛緩度というよりは、この三形態がいずれもその基礎に種族的所有を置きながらも、種族の一員としての生産者が自分のものとしての生産条件（土地）とそれぞれ特徴のある結合の仕方をしているとみるべきで、むしろ弛緩度というなら、アジア的共同体の弛緩度が弱くなれば古典古代的共同体に、さらにそれが弱くなればゲルマン的共同体になる、という見方に通じてしまう。それ故、それぞれの共同体の特殊性による区別というべきであろう。そして、この特殊性によって弛緩度がみられるというべきであろう。逆ではない。また、この私的所有の發展度によって、論理的に段階序列として展開されているという点も、すでにみられたように、マルクスが第二形態では「私的所有」といっており、第三形態では「個別的所有」として両者を区別している点からも、単なる私的所有の發展度による段階的説明でないことは明らかである。

なお太田秀通氏は、『共同体と英雄時代の理論』（増補版、山川出版社）で、所有形態は、所有の主体のあり方と、その客体への支配の仕方によってきまるとして、共同体的土地所有について次のよ

うにのべている。

「共同体的土地所有は、土地所有の一群の形態であり、それは土地所有の主体のあり方が、共同体とよばれるにふさわしい特殊性をもっていることをい表している。それは、土地所有の主体が、孤立した個人ではなく、共同体あるいは共同体の成員であるような形態である。すなわち土地所有が、原始的群団・種族・村落共同体・都市共同体などの共同体を前提としている時、この関係を共同体的土地所有とよぶ。それ故、共同体的土地所有とは、必ずしも共同体が所有の主体であるような共同所有（*das Gemeinvermögen*）ないし総有（*das Gesamtvermögen*）のみを意味するとは限らない。共同体の成員がその成員たることによって、すなわち共同体への所属関係に立脚して私的に土地を所有しているような形態も、共同体的土地所有とよんで一向さしつかえない。いいかえれば、共同体的土地所有にも、いろいろな形態があるとともに、それらの中には、替耕地制までの農業共同体の段階に位置づけ得ないものもあるし、階級社会以前の共同体といえども常に共有または総有にもとづくものとも考えることもできない。それ故、共同体の歴史的諸形態を考察する場合には、階級関係と、したがってまた社会構成と関連づけて、形態学的研究を遂行しなければならないとともに、共同体が土地所有の主体であるのか、あるいは共同体を媒介として成員が土地所有の主体になっているのか、ということ、すなわち、共同体成員の共同所有であるのか、共同体的私的所有（*das gemeinschaftliche Privatvermögen*）であるのか、ということを明確にしておかなければならない。共同所有は、共同体的土地所有の一形態または一段階であるにすぎない」（五一―六ページ）

右の文章による限り、氏は共同体所有の一形態として共同所有と共同体的私的所有を考え、両者を区別づけている。しかし、マルクスのばあいは、所有の本源的形態は、共同体的土地所有であり、これには三つの形態があるが、すべてに共通するものは、共同体と個人の関係が内的に結合して不可分の関係にあり、したがって、氏のいう共同所有と共同体的私的所有とが統一的（または同一的）にのみ存在している、という解釈である。この点については、氏も、「共同体的土地所有を問題にする場合、共同所有と私的所有という相反する、対立するモメントが、いかに同一共同体に統一され、それぞれのモメントのあり方がいかに共同体の構造を規定しているかが問題なのであり、私的所有におけるあの処分権についての相対的・絶対的の差別は、この問題に従属してとりあげるにすぎない。したがって、共同所有に対立する私的所有に対する共同体的規制の強弱というあの排他性の貫徹度に関する論議は、共同所有と私的所有、共有と私有の対立を統一した、矛盾に満ちた共同体的土地所有の構造差の問題の処理には役立たない」（四七ページ）とのべている。

（四）塩沢氏の「共同体」と「生産様式」に関する

最終的見解

塩沢氏は、共同体と生産様式の諸形態についてのマルクスとエンゲルスの最終の完成された見解を整理すれば次のようになる、として氏の理解されたところを以下のようにのべる。

「1 原始的共同体

原始的共同社会について、マルクスは、『ヴェラ・ザスリッ

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

子宛の手紙』の草稿の中で、農業共同体と比較しながら、次の三つの特色をあげている。第一は、それが『もっぱら、その構成員の自然的な血縁関係のうえにたてられている』（選集一三卷上―一八七ページ）こと。第二は、『共有の家屋がこれらの共同社会の物質的基礎であった』（同上、一八七ページ）こと。したがって、ここでは、家屋や庭園の私有もまだ行われていない。第三は、『生産は共同で行われ、ただその生産物だけが分配された』（同上、一八七ページ）ことである。このように原始的共同体においては、耕地はもちろんのこと、宅地・園地・家屋の私有もなく、家族単位の分割耕作もないのであるから、私有と個性の成長は全くみられない。したがって、個人は共同体の中に完全に埋没しており、階級分化もおこなわれない。

2 アジア的形態——アジア的生産様式（貢納制）

一、家屋と庭園（ヘレディウム）はすでに家族の私有となり耕地は共有であるが、家族の計算で分割耕作され、生産物も個人的に占取されている。したがって、ここではすでに、まだきわめて弱いとはいえ、私有と個性の成長がみられる。

二、土地の重要部分はまだ直接に種族共同体自身によって共同に占取利用されており、家族はその土地の分割耕作（二時的な私的利用）をすぎにすぎない。開墾・灌漑・共同耕作などにおける共同労働も強くのこり、この共同労働を通じてのみ、『個々の人間の財産が実際に利用』（『諸形態』前掲訳一三ページ）されうるのである。したがって、ここでは個人の成長はきわめ

て弱く『共同体に対して自立的なものとなることはない』（『諸形態』前掲訳三〇ページ）。

三、アジア的形態の共同体を基礎として、アジア的生産様式が成立し、この生産様式の支配的な社会構成がアジア的専制国家である。多くのアジア的な小共同体の上に、結合的統一体がそびえ立ち、それが最高、唯一の所有者としてあらわれる。『この統一体が現実の所有者であり、また集团的所有の現実の前提でもある』（『諸形態』八ページ）。したがって、アジア的専制国家における前提集団Ⅱ基礎共同体は、この結合的統一体なのであり、個々の小共同体ではない。個々の小共同体は所有を剝奪されて、世襲的占有者の地位におち、小共同体の剰余労働部分は、専制君主に人格化された統一体に所属することになる。これが東洋的専制国家である。共同体のアジア的形態においては、個人の成長がきわめて弱いために、共同体が全体として専制支配のもとに入るのであり、マルクスは『資本論』においても、これを共同体を基礎とする国家権力、共同体の上をこびえ立つ国家権力として扱っているし、エンゲルスも『国家権力』が、……共同体が土地を共同で耕作しているか、あるいはせいぜいこれを一時的利用のために個々の家族に譲っているにすぎない時期に発生しているようなところでは、……国家権力は専制君主制というかたちであらわれている』（『フランク時代』選集一六卷二八五ページ）としている。（三五—三六ページ）。

ここで塩沢氏がアジア的形態として指摘しているのは、マル

クスが農業共同体の特質としてのべているところのものである。マルクスが『諸形態』で所有の第一形態の説明のなかであげたアジア的形態の説明ではない。塩沢氏はアジア的形態イコール農業共同体としているのであるから、当然そうなるのであるが、そこで次に、右の農業共同体をアジア的専制国家という点で要約すればとして氏は以下の三点を指摘する。

「(一) アジア的生産様式とは、専制国家（Ⅱ君主）による多くのアジア的な小共同体や小共同体内の諸個人に対する支配の体制である。

(二) 集团的所有の前提となる基礎集団は、結合的統一体Ⅱ国家であり、したがって、集团的土地所有は、この国家（またはその代表者としての君主）による、国民的規模で集積された集团的所有として現われ、小共同体の所有権や、共同体の個人の私有は、この国家的集団所有によって制約されている。

(三) 国家Ⅱ専制君主と小共同体との間の剰余労働収奪の形態は、特殊な貢納制度であり、したがってそれは奴隸制の一形態ではない（四〇ページ）。

右の三点は不十分なが、アジア的所有の特質の一部分の指摘である。こうして塩沢氏は、農業共同体とアジア的形態のそれぞれの特質をあげ、それらを結びつけてしまうのである。

次に塩沢氏は古典古代的形態について、三点にわけて証明する。

「3 古典古代的形態——古代的生産様式（奴隸制）」

(一) 共同体の古典古代的形態の基礎集団は都市共同体であり、それは諸種族の連合体が集住したものである。

(二) 共同体内部に家父長制家族が成立し、この家族によってヘレディウムのみでなく耕地 *Parzellen* も私有されていて、アジアの形態よりも私有の要素が強い。土地ばかりでなく、家長の下に動産の富や奴隷も所有され、耕作も奴隷を使用して家族によって自立的に行われ、生産物も私的に所有する。だが、他方には共同体そのものの所有地 *ager publicus* があり、共同体存立の土台となっている。『古代の諸国民の下においては、国家的土地所有と私的土所有との矛盾した形態が併存しており』（諸形態」二四ページ）、しかもこれが相互に媒介されている。家族が土地の私有者となるための条件は、『共同体における成員権であり』（『諸形態』一四ページ）、『かれが国家の一員たることによって媒介されているのであり、国家の存在によって』（同、一四ページ）、したがって公有地の存在によって媒介されている。他方国家としての共同体は、『自由かつ平等の私的所有者たちの間の相互関係』（同、一三ページ）であるから私的所有者たちの *Parzellen* における健全な再生産によって保証されているのである。

(三) 共同体の古典古代的形態を基礎にして、古代的生産様式が成立し、この生産様式の支配的な社会構成が古代都市国家である。ここでは個人の自立性が高く、土地の私有が、公有地によって媒介されているとはいえ、一応確立しているので、この成

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

員の私的自立性にもとづいて奴隷制的な階級分化が進行し、強大な家父長権力の下に奴隷が集積され、奴隷制が展開する。そして都市共同体は、この奴隷所有者としての私的土地所有者たちによって構成される支配者の組織となる。奴隷とは、集団としてのみ所有者となりうる社会で、集団成員となれないものである。集団的所有を基礎とする所では、個人が所有者となるための基本的条件は、『種族の成員たること』（『諸形態』四三ページ）である。古典古代的形態の下でも、個人が私有者となるための条件は、『共同体における成員権』（『諸形態』一三ページ）であり、市民であることによってはじめに私有者たりうるし、また分割地 *Parzellen* の私有者であることによつて市民権をうる。私有の発生にもとづく階級分化で没落して私有を失ったものや征服された集団の成員は、もはや共同体成員 || 市民ではなくなり、したがって奴隷とならざるをえないのである。そこに奴隷制が開花する。』

最後にゲルマン的形態を以下のように要約される。
「4 封建的 || ゲルマン的形態——封建的生產様式

（農奴制）

(一) 前提集団は自立的な土地所有者たちの隣人共同体である。

(二) 共同体の封建的形態においては、ヘレディウムばかりでなく、耕地も家族の私有となり、森林や牧野や荒蕪地だけがなお共同体全体の所有となっているのであるが、この共同地も、本来分割して使用されえない土地部分であるために共同地となっ

『資本制生産に先行する諸形態』について(六・完)

一八四

ているのであり、(『諸形態』二三ページ)、それさえ家族の個人的財産の補充物(同、二三ページ)として持分化されている。

つまり、ここでは古典古代的形態のように私有が共同体的所有によって媒介されているのではなく、『本質的には経済的完全体なるものは各々の個別的な家であって』(同、二四ページ)、

『逆に共同体と共同体的財産との存在が媒介されたものとして現われるのである』(同、二三ページ)。私有の要素は古典古代的形態より更に強くなっている。このような土地所有形態について、マルクスは、『資本論』の中でも次のようにいっている。『農奴でさえも、ただに自分の家に附属する分割地〔零細地〕(Parzellen)の所有者——貢納義務ある所有者だったといえ——であつたばかりでなく、共同地の共有者でもあつた』(一巻二四章、注一九一、長谷部訳、第四分冊三二二ページ)。

(三)共同体の封建的形態を基礎にして、封建的生産様式が成立する。封建的生産様式における剰余労働取収の形態は農奴制であり、この生産様式の支配的な社会構成は封建国家である。(四〇—四二ページ)

以上が、塩沢氏によって整理された、共同体および生産様式の内容に関する、マルクスとエンゲルスの最終的な見解である。

だが、これまでも挿入的にのべたように、右の氏の見解には、ザスリッチへの手紙で展開されているマルクスの論旨への誤解がみられ、したがって、極めて重要な疑問点が残らざるを

えないと思われる。

そこで次に、この疑問点を明らかにするために、「ヴェラ・ザスリッチへの手紙」の検討を試み、塩沢氏のように理解することが妥当であるかどうかを明らかにしたい。

七 ヴェラ・ザスリッチ宛書簡・草稿の検討

「ヴェラ・ザスリッチへの書簡・草稿」は、ザスリッチ Beza Zasyrnych 女史の一八八一年二月一六日付の質問に対するマルクスの回答(一八八一年三月八日)のための四つの草案である。質問の内容は、マルクスの手紙とその草稿から知ることができる。すなわち、ツァーの支配下で革命的情勢が激化するなかで、ロシアの「マルクス主義者」なる人たちが、資本主義的生産がロシアでもその支配を確立する必然性があるなら、当然ロシア人民の大多数が賃金生活者に転化されなくてはならず、したがって、あらかじめその共産主義的所有が廃止されることによつて収奪されなくてはならない、だからロシアにおける農業共同体の崩壊は歴史的必然である、と考えているが、この点マルクスはどう考えているか、ということである。マルクスの学説(とくに『資本論』での見解)によれば、封建的生産から資本主義的生産への転形が、生産者の収奪を出発点としているのであるから、ロシアでも同様に農業共同体は解体される必要が、ロシアにおける資本主義の発展から、さらに社会主義への移行のために、あるはずである、と考えてよいのか、という点

が、ザスリッチによって質問されたのである。

右の質問に対しマルクスはどのように答えたであろうか。マルクスは、ザスリッチへの手紙で、まず次のように書いている。

「資本主義的生産の創世紀を論じたさい、結局、『生産者と生産手段との根本的な分離』（『資本論』フランス版、三一五ページ、第一段）「エディシオン・ソシアル社一九五〇年版、第三冊、一五四ページ」があり、また『この発展全体の基礎は耕作者の収奪である。それが根本的な方法でおこなわれたのはまだイギリスにおいてだけである。……しかし、西ヨーロッパの他のすべて、の国も同一の運動を経過している』と私は言った（前掲第二段）。「エディシオン・ソシアル版、一五六ページ」

だから私は、この運動の『歴史的宿命』をはっきりと西ヨーロッパの諸国に限定したのである。では、いったいなぜであろうか？　どうか第三章を対照ねがいたい。そこにはこう書いてある。

『個人的で分散的な生産手段を社会的に集中された生産手段に転化するこの掃蕩の運動、多くのものものわずかばかりの財産を二、三のものもの巨大な財産にするこの掃蕩の運動、勤労人民のこの苦痛にみちた、このおそるべき収奪、これこそ資本の起源であり、それこそ資本の創世紀なのである。……自分自身の労働にもとづいた私有は、やがて他人の労働の搾取に、賃金制度にもとづいた資本主義的私有にとってかわられるであろう』

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

（三四〇ページ第二段）「エディシオン・ソシアル社版、第三冊、二〇四ページ、ドイツ版第二章第七節」

このようにして、要するに私有の「形態から私有のもう一つ別の形態への転化があるわけである（西ヨーロッパ的運動）」

（「ヴェラ・サスリッチへの手紙」草稿、国民文庫『資本制生産に先行する諸形態』、手島正毅訳、九三―四四ページ）

そして続けて次のようにいう。

「ロシアの農民がしつかりにぎっている土地は、いまだかつて彼らの私有であったことはないのであるから、どうして、この運動があてはまりうるであろうか？」

このロシアの農民のしつかりにぎっている土地とは、マルクスによると、前古代的な型の共有の発展したものである。農業共同体のことである。ただし、ロシアで生きた農業共同体は、しだいに前古代的共有がその原始的性格を捨て去って成立したものであり、全国的な規模のうえに立つ集団的な生産の要素として直接に発達できたものである。ロシアでこのような農業共同体の発展がみられたことは否定できない。とくに農奴解放のとき、巨額の公債、巨額な金額が農民の負担と犠牲において支払われることがなかったら、農業共同体の宿命的滅亡論などは、とても成立しなかったであろう。

のみならず、「ロシアの共同体の（発展の道をたどる）維持にとつて有利なもう一つの事情」が存在する。それは「共同体が（西ヨーロッパ諸国における）——内のことばはマルク

スによって消されている。以不同し——資本主義的生産と時を同じくして存在していることだけでなく、この共同体が、いまの社会制度のまだそこなわれないでいた時代をすぎたのちまで生きのこっており、その反対に、共同体とあい対する社会制度が、西ヨーロッパでもまた合衆国でも、科学とも、人民大衆とも、この社会制度の生みだす生産諸力そのものとも闘争していることである。つまり、共同体とあい対する社会制度は一つの危機のなかにあり、この危機はこの社会制度が廃止されること、近代社会がつかいには共有の『前古代的な』型に復帰するほかはないであろうということである。ところで、この形態についてであるが、その仕事をワシントン政府から支持されている、革命的傾向の疑いなどすこしもないアメリカの一著者「モルガン」が言っているように、近代社会がそれに向ってすすんでいる『新しい制度』は『前古代的社会的型』よりもより高い形態における「in a superior form」復活 [revival] となろう。』とすれば、この『前古代的』ということばをあまりおそろしがるにはおよばないわけである（同上、九六ページ）。

しかし、前古代的な共同体について、マルクスは「われわれは、それについてなにひとつ知らない」と率直にのべて、「この共同体はたえまない外戦と内乱のなかで死滅したのである。それは、おそらく、ゲルマン諸部族がイタリア、スペイン、ゴールなどを征服しにやってきたとき非業の死をとげたのである」といふ。しかし、マルクスはこの前古代的な型の共同体の「自然の生活力」は二つの事実によって証明されている、として、①それは現在も地方——たとえばマルクスの故郷トリーヴ「トリール」地方——に保存されていること、②この前古代的な型の共同体にとってかわった共同体——森林や牧地や荒蕪地などはなお分割しなままであるのに耕地は私有となつていて共同体——のうえに、固有の特性をはっきりと示していること、の二点をあげている。

そして続けて次のようにいふ。

「タキトウス（およそ五五—一二〇年）の時代以後、われわれは、〈ゲルマン的〉〈農村的〉〈前古代的〉共同体の生活についても、その消滅の仕方および消滅の時期についても、なにひとつとして知らないもの、少なくとも、その出発点については、ジュリアス・シーザーの物語のおかげで知っている。彼の時代にはすでに、〈可耕〉土地は毎年割替えされていたのであるが、それは、ゲルマン人たちの〈さまたまな〉同盟に所属している諸氏族や諸部族のあいだに割替えられたのであって、一つの共同体の個々の成員間に割替えられたものではなかった。それゆえ、農村共同体は、ゲルマンにおいては、よりいっそう前古代的な型から出てきたものであり、自然成長的な発達生産物だったのであって、できあいのものがアジアから輸入されたのではない。そこ——東インド——でもわれわれはそれに代わつたのであるが、それはつねに、前古代的構成体の最後の期間

または最後の時期としてである（同上、九七―八ページ）。

したがって農業共同体は、マルクスによれば、アジアでは——そして西欧でも——つねに前古代的構成体の最後の期間または最後の時期として出現したのである。そしてマルクスは、農業共同体をそれよりも前古代的な型から区別する特質を示さなくてはならない、として、

「まず第一に、それ以前の原始的な共同社会は、もっぱら、その構成員の自然的血縁関係にもとづいている。ところが農業共同体は、この、強くはあるが狹隘な紐帯を断ちきることによって、順応し、ひろがり、かつよそのものとの接触をうけることがより可能となる。

次に、農業が導入されるずっとまえには、共有の家屋がこれらの以前の共同社会の物質的基礎の一つであったのに反し、農業共同体では、家屋とその付属物たる屋敷とがすでに耕作者の私有となっている。

最後に、より前古代的な共同社会では、生産は共同でおこなわれ、ただその生産物だけが分配されたのであるが、これに反して、「農業共同体では」耕地は依然として共同体的所有ではあるが、それは農業共同体の構成員のあいだで定期的な割替えされ、そうすることによって、おのおのの耕作者は自分にあてがわれた耕地を彼自身の計算で耕作し、その成果を個人的に占有するようになっているのである。この、集団的ないし協同的生産の原始的な型は、いうまでもなく、孤立した個人の弱さの

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

結果であって、生産手段の社会化の結果ではなかった」（同上九九―一〇〇ページ）とのべていたのである。

したがって、前古代的な型の特質は、

①原始的な共同社会は、もっぱら、その構成員の自然的血縁関係にもとづいている、

②共有の家屋——というよりは住居——が共同社会の物質的基礎の一つであった、

③生産は共同でおこなわれ、ただその生産物だけが分配された、の三点であった。

これにたいして農業共同体は、①自然的血縁関係の狹隘な紐帯を断ちきってひろがっている、②森林や牧地や荒蕪地などは分割しないままである。③家屋とその付属物とが耕作者の私有となっている、④耕地も共有であるが、共同体の構成員のなかで定期的な割替えられ、その成果を個人的に占有していた、⑤農業共同体の時期は、共有から私有の過渡期、原始的構成体から二次的構成体の過渡期としてあらわれた、のである。

以上のようなザスリッチ宛書簡・草稿の検討の結果から、アジアの生産様式イコール農業共同体である、という結論が生まれるであろうか。マルクスは、前古代的な型の共有が次第に原始的性格を捨てて農村共同体に移行したこと、危機の解決は近代社会の廃止、共有の前古代的な型に復帰すること、ゲルマンでは農村共同体はアジアから輸入されたものではないこと、東インドでも農村共同体を発見するが、それはつねに前古代的構

成体の最後の期間または時期であり、西欧でも同様であることなどについてはのべているが、農業共同体がアジア的生産様式であるという論拠は何ものべていないのである。

だから、農業共同体という視点からみるなら、(1)アジア的、古典古代的、ゲルマン的共同体はいずれもみな農業共同体であり、(2)かつ同時にそれらにはそれぞれ区別される所有形態の特質があることによって、三形態として分類されているということであろう。したがって、農業共同体は前古代的な型の共有から必然的に移行して生まれたものであり、アジア的、古代的、ゲルマン的共同体の社会も、農業共同体という視点からみれば、共通性をもつものとして把握できると同時に、にもかかわらず、所有形態において、いずれも二次的でなく本源的でありながら独自の形態をもつたものとしてそれぞれ三形態に分けて把握されている、と考えられるのである。⁽²⁹⁾

(29) アジア的、古典古代のおよびゲルマン的所有に共通のメルクマールをここで指摘するなら、以下のとおりである。

① いずれの形態も共同体を基底としている。そして、アジア的、古代的、ゲルマン的という三つの共同体は、所有の本源的形態を規定するものとしてとらえられている。だから、土地所有の本源的形態の三つの典型（または基本形態）の基底には、それらの三つの土地所有の本源的形態を規定するものとしての共同体の三つの典型（または基本形態）が基底的存在している。

② これらの三つの形態にあっては、土地所有と農業とが経済制度の

基礎である。

③ 使用価値の生産、個人がその基礎をなしている共同体に対して一定の関係にある個人の再生産が、その経済的目的である。

④ 本源的な土地所有にあっては、労働によることなく、むしろ労働の前提をなすものとしての労働の自然的条件、本源的労働用具であり、仕事場であり、原料の貯蔵場である土地の領有がなされている。すなわち諸個人は、自分のものとしての労働の客観的諸条件、彼の主体性が自分自身を実現するための非有機的自然としての客観的労働諸条件と単純に関係を結ぶ。つまり、ここでは生きた個人と、この個人の再生産の客観的条件としての土地とが単純な関係を結んでいる。

⑤ この場合、個人は孤立した個人でないのもちろんであって、労働の客観条件に対する個人の関係は、共同体成員としての彼の存在に媒介されている。共同体の現実の定在は、労働の客観的諸条件に対する個人の一定の所有形態によって、第一形態、第二形態、第三形態と、それぞれ規定される。

⑥ では、これらの三形態の相違はどこから生ずるのか。それは、一部は種族の自然的素質から生ずるのであり、他の一部はその種族が現実的に所有者として土地に対する関係を結ぶときの経済的条件に依存する。そして、種族の自然的素質とか経済的条件それ自体は、気候、土地の物理的性状、物理的に条件づけられた土地の利用様式、敵対種族または隣接種族との折衝、そして移動と歴史的事件等がもたらす変化に依存する。

⑦ 所有の本源的形態は、いずれもそれ自体直接的な共同所有である。たとえば、東洋の形態はスラヴ的所有では変形されており、古代

的およびゲルマン的所有では対立的に發展しているとはいえず、対立的ではあっても、しかもなおそのかくれた基礎は共同所有である。

⑧これらすべての形態において、あらかじめ定められた、多かれ少なかれ自然的な、あるいは歴史的に生成し、しかも伝統となった、個々人の共同体に対する関係の再生産が、これらの形態の發展の基礎である。だから、この基礎ははじめから制限されていた。そして、この制限がなくなるにつれて、衰亡と消滅をあらわす。これらの形態では、生産が人間の目的であり、富（偏狭なブルジョアの形態を皮むけば、富とは普遍的な交換によってつくり出される個人の欲望、能力、享樂、生産力等の普遍性である）は生産の目的（近代社会の場合）としてはあらわれない。

また所有の本源の形態と二次的形態についてマルクスの所説は次の通りである。

自由な労働力とこの自由な労働力の貨幣との交換は、賃労働の前提であり、また資本の歴史的條件の一つである。それゆえ自由な労働力をそれが実現される客観的諸條件——労働手段と労働材料——から分離することが、もう一つの前提である。つまり労働力の資本にたいする、すなわち資本としての客観的な労働力の諸條件にたいする関係行為は、労働者が所有者であったり、あるいは所有者が労働したりするさまざまな形態を解体する歴史的過程を前提とするのである。

ところで、そもそも生きて活動する人間と、彼らが自然とのあいだに物質代謝をするさいの自然的非有機的諸條件とのあいだの統一、したがってまた人間による自然の領有、こうしたことは、説明の必要のない、自明の自然のことがらであり、歴史的結果ではなく

『資本制生産に先行する諸形態』について（六・完）

歴史の前提である。むしろ、人間的定在のこれら非有機的條件とこの活動する定在とのあいだの分離、賃労働と資本との関係で完全なものにはじめて指定されるような分離こそが説明されなくてはならない。

さて、奴隸関係や農奴関係においては、右のような分離は生じない。むしろ社会の一部分は社会の他の部分自体から、他の部分に固有の再生産の単に非有機的かつ自然的な条件として扱われる。つまり、奴隸制や農奴制のもとでは、労働者自身、ある第三者たる個人または共同体のために行う生産の自然的條件の一部としてあらわれる。だから、奴隸制および農奴制は、共同体と共同体内の労働のうえにきざれた所有の必然的で首尾一貫した結果であるとはいえず、つねに二次的であって、本源のものではない。だから、奴隸は、自己の労働の客観的諸條件に対しては、どのような関係ももっていない。むしろ労働自体は、奴隸の形態においても、農奴の形態においても、家畜とならんで、または土地の付属物として、ひとしく生産の非有機的條件として、その他の自然物の列中におかれる。

たとえば、ペルーにある共同体的生産および共同所有 Gemeinheitsgenuss は、明らかに二次的な形態であり、それは征服種族によってもちこまれ、また移植されたものである。これら征服種族は、自分たちのあいだでは、インド人やスラヴ人のあいだでみられるような、古代のいっそう単純な形態をもつ共同所有と共同体生産を知っていた。同じくウェールズのケルト人のあいだに見いだす形態もまた、このケルト人のなかに移植され、征服者によって、より未開な被征服種族のあいだにもちこまれた、二次的な形態のようである。

もし人間自身が、土地の有機的付属物として、土地といっしょに征服されるとすれば、人間は生産条件の一つとして一括征服されることになり、こうして奴隷制や農奴制が発生するが、これらはあらゆる共同団体の本源の形態をやがてゆがめ、また変形させ、そしてそれ自体これら共同団体の基礎となる。単純な構成は、このことによつて否定的に規定される。すなわち、種族団体(共同団体は本源的にはこのなかに溶解する)を基礎とする所有の基本条件——種族の構成員であること——は、種族によつて征服された他の種族、すなわち従属させられた種族として財産を喪失させ、そしてこの種族自身を、共同団体が自分のものとして関係を結ぶ、その再生産の非有機的条件のなかに投げ入れる。だから、奴隷制と農奴制とは、種族団体にもとづく所有が一段と発展したものである。

次に、原始共同社会と資本主義社会との対比として、マルクスの指摘するところは以下の通りである。

原始共同社会の特質は、「生産手段の共有」と「個々人と共同体との不可分の結びつき」および生産の目的が個人と共同体を維持するための「使用価値生産」にあった。この対極にある社会が資本制社会である。すなわち、「生産手段の私的・資本主義的所有」、「個々人の二重の意味での自由」(生産手段からの自由、つまり生産手段をもっていないことと、封建的・身分的支配からの自由)、および生産の目的が「使用価値生産」ではなく、「(交換) 価値生産」であること、このことが資本制社会の特質である。

資本制生産様式のためには、

- ① 自然的生産条件としての土地に対する所有関係の解体
- ② 労働者が用具の所有者としてあらわれる諸関係の解体

③ 生産者が生産の完了以前に生活に必要な消費手段を占有している状態の消滅

④ 労働者自身が直接に客観的生産条件のもとに属している(奴隷・農奴)という諸関係の解体

が必要である。

以上のような「諸形態」におけるマルクスの所説の核心を把握するなら、これまでみたところの諸説をどう評価するかの基準・立場がおのずから形成されるであろう。

さて右の「農業共同体」固有の二重性——自然的血縁関係の狭隘な紐帯の切断と家屋とその付属物たる屋敷の耕作者による私有——は、農業共同体に力強い生命力を賦与する。すなわち耕地の共同体所有は社会関係の基礎として存在しているため、この社会を強固に維持するのであるが、同時に、私有の家屋と耕地の分割耕作、および成果の私的占有は、個性の発展を可能にするからである。だがこの二重性は時の経過とともに、この農業共同体解体の一つの源泉となる。家畜や農奴などの形での動産の富の漸次的蓄積が、経済的および社会的平等を解体するものとして作用するからである。この結果、耕地の私有財産化、森林、牧地、荒蕪地などの私的占有化が生ずる。こうして農業共同体は、どこでも前古代的社會構成体の最後の型としてあらわれ、古代および近代の西ヨーロッパの歴史的運動においては、共有から私有への過渡期としてあらわれる。

しかし、マルクスは、どんな事情のもとでも、農業共同体の

發達は、このような道をたどらなければならない、というのでは決してない。それは二つの可能性をもっている。すなわち、農業共同体のなかの私有の要素が集団の要素にうちかつか、逆になるか、であつて、そのどちらになるかは、それがおかれている歴史的、經濟的環境による、とのべている。⁽³⁰⁾

(30) ではロシアの「農業共同体」の運命はどうか。この問題についてマルクスは以下のごとくいう。

「ロシアは、『農業共同体』がこんにちまで全国的な規模で維持されているヨーロッパでの唯一の国である。ロシアは、東インドのように外国の征服者のえじきではない。ロシアは、もはや近代世界から孤立して存在しているわけでもない。一方では、土地の共有は八ロシアが物質上ならびに精神上的の諸關係をむすんでいる西洋の資本主義的生産と時を同じくして存在していることあいまつて、ロシアが直接かつ漸進的に、分割地的な個人主義的な農業を集団的農業に転化することをゆるしている。そして、ロシアの農民たちがすでにそれを未分割の牧地で実行しており、その国土の地勢が大規模耕作をうながしており、農民がアルテリ契約になれていることは、ロシアが分割的労働から協同労働へ移行するのを容易にしている。そして最後に、農村共同体を犠牲にしてこんなにもながいあいだ生存してきたロシアの社会は、このような移行に必要な前払資金を農村共同体にかえさなければならぬ。へいうまでもなく、この共同体をその現在の基礎のうえで正常な状態におくことからはじめなければならぬ。というの、農民というものは、どこでもいささ

『資本制生産に先行する諸形態』について(六・完)

の急激な変化にたいする反対者であるから。V他方において世界市場を支配している西洋の八資本主義的V生産が時を同じくして存在していることが、カウディーネの岐路(紀元前三二一年ローマ人がサムニウムに敗れたところ、難局)を経ることなしに、ロシアが資本主義制度のつくりあげた肯定的な諸成果をこの共同体のなかに汲みいれることを可能にしている」(同上、一〇一―二ページ)。

このように、ミールが、全国的規模で維持され、今後も資本主義の諸成果をとりいれて生きつづける可能性を指摘したのち、マルクスは次のように続ける。

「いわゆる農奴解放以来、ロシアの共同体は、国家によつて、異常な經濟的諸条件のもとにおかれた。そしてそのとき以来、たえず国家は、その手に集中された社会的な諸力によつて、それをさいなむことをやめなかつた。国家の財政上の苛斂誅求によつて衰弱させられた共同体は、交易や土地所有や高利貸を通じて搾取しやすい気力のない素材と化してしまつた。外部からくわわつてきたこうした抑圧は、共同体そのものの内部にそれまであつた利害の衝突を激化し、そして急速にその崩壊の萌芽を發育させたのであつた。だがこれですべてではないのだ。農民の負担と犠牲において、国家は、西洋の資本主義制度の枝を温室のなかでへ成長させるように補助をあたえ、成長させたのである。ところがこれらの諸部門は、農業の生産的な諸前提をすこしも發達させないで、非生産的な仲介者たちによる農業生産物の盜掠を容易にし、つよめるのにもっとも適してい

るのである。このようにして、国家は、もはやすっかり衰弱した『農村共同体』の血をすすするあらたな資本主義的寄生虫を富ませるために協力したのである」（同上二〇八ページ）。

ではなぜ国家は搾取の好対象であった農村共同体をいまや圧殺しようとするのか。こうした当然の疑問に対してマルクスは次のようにいう。

「しかしながら、人は次のように自問自答する。なぜ、これらすべての利害関係者が（私は、政府の保護のもとにおかれている大産業をこれにふくめているのである）農村共同体の現状のうちでばら儲けをしたのか、なぜ、それらは金の卵を生む牝鶏をことさらに殺そうとたくらんでいるのか、と。それはまさに、彼らが、『この現状』はもはや維持しがたい、したがって、それを搾取する現在の様式はもはや流行しない、と感じているからである。すでに、耕作者の貧困が土地を害し、土地は不毛になっている。へ気候が順調なため何年か土地の生産物が、豊作であっても、それは飢饉のために相殺されてしまう。ロシアは、穀物を輸出するのではなくて輸入しなければならない」（同上二〇九—二一〇ページ）。

「最近一〇年間の平均は、農業生産額がたんに停滞しているばかりではなく後退していることをしめしている。ついに、はじめてロシアは、穀物を輸出するのではなくて輸入しなければならないことになった。もはや、一刻の猶予もしておれない。だから、けりをつけなければならぬ。農民のうちで多少とも

生活のゆたかな少数者を農村の中間階級にしたてあげ、大多数のものを、あからさまに言えばプロレタリアに転化しなければならぬ。——この目的のため、『社会のあらたな柱石』の代弁者たちは、共同体にくわえられた当の傷のことを、すべてその老朽をしめす自然の徴候だとして通告するのである。

……『農村共同体』の現状のなかでばら儲けをしていたのに、なぜ、ことさらにその死をたくらむにいたるのだろうか？ なぜ、それらの代弁者たちは、共同体にくわえられた傷を、それはすべてその自然の老衰をしめす動かしえない証拠だとして通告するのだろうか？ なぜ、彼らは、金の卵を生む彼らの牝鶏を殺したがるのだろうか？ それは、ただ、経済的な諸事実が——それを分析すると深入りしすぎることにしろ——共同体の現状がもはや維持しがたいという秘密を、自然のなりゆきとして、人民大衆を搾取する現在の方法がもはや流行おくれになるであろうという秘密を暴露したからにすぎない。そこであらたな方法が必要となるわけだ。ところで、このあらたな形態は、多種多様をきわめるいろいろの形態のもとにほのかに見えているのだが、それはつねに、次のことに帰着する。すなわちそれは、共有を廃止し、農民のうちで多少とも生活のゆたかな少数者を農村の中流階級にしたてあげ、大多数のものを、あからさまに言えば、プロレタリアに転化してしまうということである」（同上二〇九—二一〇ページ）。

いまから九〇年近くもまえの、ロシアの農民の苦境について

のマルクスの分析は、現在の日本の小農切り捨て政策下の日本農民の運命をそのまま物語っているといつてもよいであろう。なぜ、これまで日本社会をその底辺にあつて支え、「金の卵を生む牝鶏」であつた日本の零細農民を、現在、政府は、絞め殺そうとするのか。農民のうちで多少ともゆたかな少数者を農村の中間階級にしたてあげ——「自立農家の育成」——、大多数の者をプロレタリア化させようとしている財閥・政府の代弁者は、現在の農業の荒廃を、政策の結果ではなく、古米、古々米を始めとする過剰米によると宣伝しているのである。だが、一世紀以前のロシアの共同体の生活をおびやかすもの、「それは歴史の宿命でもなければ、理論でもない。それは、国家による抑圧であり、また、この同一の国家が農民の負担と犠牲において強力なものにしている資本主義的侵入者による搾取である」(同上二一九ページ)と同様に、今日の日本の小農の生活をおびやかすものも、「それは、歴史の宿命でもなければ、理論でもなく、それは、農業基本法政策を掲げながら小農を切り捨てつつある国家による抑圧であり、また、この同一の国家が農民の負担と犠牲において強行しつつある貿易自由化による搾取である」といえよう。そして日本の零細農民の生きる途は、資本主義のもとではありえないように、ロシアの農村共同体の生きる途も、ツァー国家のもとではありえず、それは、将来の共産社会の再生によってのみ再生しうるものである。だからマルクスは次のように指摘している。

『資本制生産に先行する諸形態』について(六・完)

「西ヨーロッパでは、共同体的所有の死滅と、資本主義的生産の発生とは、〈数世紀をもつてかぞえられる〉長期の、継起的におこつた一連の経済的革命と発展を含む中間期によって、相互にへだてられている。〈そこでは、共同体的所有の死滅がただちに資本主義的生産を発生させたのではない。〉そして、資本主義的生産とは、この一連の継起的な経済的革命と発展の最近のものにほかならない。それは、一方では、社会的生産力をいぢじるしく発展させられども、他方では、〈自己の暫時的性格を〉自己が生みだす生産力そのものと自分自身が両立しないことを、暴露したのである。それ以後というものは、その歴史はもはや、敵対と、恐慌と、争鬭と、惨劇の、歴史にすぎない。最後に、それは、利害のために目の見えないものは別として、すべての人々に、その純粹に暫時的な性格を暴露してみせた。資本主義的生産が最大の発展をとげたヨーロッパ、およびアメリカ(合衆国)の諸国民が切望するのは、協同生産をもつて資本主義生産にかえ、前古代的な型の所有の、最高形態すなわち共産主義的所有をもつて資本主義的所有にかえることによって、その鉄鎖をうちくたくことにほかならない」(同上、一一五ページ)。

こうした歴史の法則を背景にして、マルクスが、「自分自身の労働にもつづいた私有は、やがて他人の労働の搾取に、賃金制度にもつづいた資本主義的私有にとつてかわられるであらう」(『資本論』、フランス版、三四〇ページ)、「エディシオン・ソシ

アル社一九五〇年版、第三冊、二四〇ページ」とのべたのは、西ヨーロッパ的運動においては、私有の一形態から私有の他の形態への転化が問題だったからであって、これを論拠にしてロシアの農民たちにあつては、反対に、彼らの共有を私有に転化させることになる、と云うことはできず、『資本論』に引かされてゐる分析は、ロシアの共同体の生命力にかなする賛否いずれの議論にたいしても、その論拠を提供してはいない、とのべ、最後に「しかしながら、私は、オリジナルな資料に材料をもとめて特殊研究をした結果、この共同体がロシアにおける社会再生の拠点である、⁽³¹⁾ということを確認するにいたつた。しかし、この共同体がこのようなものとして機能できるようにするには、まず、あらゆる方面からそれにくわつてくる有害な諸影響をとりのぞき、そののちに自然成長的發展の正常な諸条件をそれに確保してやらなければならない」(同上二三〇ページ)と結論を与えていたのである。

(31) このようにマルクスはミールを一定の条件の下では「社会再生の拠点」であると評価していたが、その後の事実、ミールが「社会再生の拠点」となる「一定の条件」をつくり出したとはいえないようである。もともと農村共同体を意味するロシア語のミールは、増田富寿氏によれば、「オプシチナと同義語であるが、オプシチナが十九世紀の四〇―五〇年代に農民問題が論議された際に官吏や知識人の間でつくられた言葉であるのに、ミールは農民の用語である。……一八六一年の農奴解放は、連帯責任により諸負担がきち

ょうめんに遂行されることを期待してミールを存置した」(平凡社『世界大百科事典』二一巻四一九ページ)のであるが、一九五八年にモスクワで出版された『小経済学辞典』“Практикий Экономический Словарь” (ノズロフ・ベルウーシン編) ソヴェト研究者協会訳、青木書店、一九六〇年)によれば、「封建制度のもとの村落共同体は解体して、消滅するか(発展した奴隷制度から、封建制度が生まれたばあい)、あるいは、幾世紀、幾千年のあいだ残存する(封建制度が未發展の奴隷制度から生まれたばあい)。村落共同体は、資本主義の時代にいたるまで存続する。ロシアでは、村落共同体は、十月革命まで存続していた」(五〇ページ)のである。